

《研究報告》

# 軍事技術開発とテクノ・ナショナリズムのメディア史： 戦艦建造から戦後の防衛産業の展望へ

塚原 真梨佳\*

## Media History of Military-Technological Development and Techno-Nationalism:

From Building Battleships to Post-war Defense Industry Prospects

Marika TSUKAHARA

This paper examines the relationship between military technology and national identity in modern and contemporary Japan from the perspective of media history. Previous studies have focused primarily on postwar civilian technologies, thereby overlooking the significance of military technology in the context of techno-nationalism, as well as the continuity between the prewar and postwar periods in the construction of techno-nationalist discourse. Focusing on the discourse surrounding battleship construction, this paper demonstrates that an intellectual foundation linking military technology to national identity had already been established during the period when Japan actively engaged in battleship development. Furthermore, by analyzing postwar narratives surrounding the battleship *Yamato*, the paper reveals that this intellectual foundation persisted into the postwar era. *Yamato* was rediscovered as a symbol that evoked Japan's past technological achievements and became a key element in shaping the national identity of Japan as a technological powerhouse, closely tied to the nation's postwar context. Finally, the paper points to future research directions, highlighting the continued linkage between science, technology, and nationalism in contemporary military development, and calls for further analysis of the social meanings attributed to military technology within Japan's postwar pacifist society.

キーワード：テクノ・ナショナリズム、ナショナル・アイデンティティ、メディア史、軍

---

\* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構専門研究員  
akiram44@fc.ritsumei.ac.jp

## 事技術、戦艦大和

Keywords: techno-nationalism, national identity, media history, military technology, battleship *Yamato*.

### I. 軍事技術とナショナル・アイデンティティの結びつきという問い

近年、日本においても防衛力に関する議論が目立つようになった。現代戦争が高度な科学技術によって遂行される以上、防衛力をめぐる議論は技術の問題でもある。では、そもそも日本社会は軍事技術をいかに意味づけてきたのだろうか。筆者は、テクノ・ナショナリズムを補助線に、日本社会が軍事技術をいかに意味づけ、自国のアイデンティティと結びつけてきたのかを検討してきた。

テクノ・ナショナリズムは、元々経済学等において自国の技術を保護する保護主義的な政策を指す用語として登場した。しかし1990年代以降、主に日本の社会学において本用語をより広義に理解する研究が登場する。それらの研究では、科学技術に依拠したナショナリティの構築や、科学技術水準の優越性を自国のアイデンティティと結びつける言説的实践をもその概念に包含される。

これらの先行研究は、主として戦後日本の科学技術に関わる言説や表象の分析から、日本人が科学技術に依拠していかなる自己像を構築してきたのかを明らかにした(阿部, 2001; 吉見, 1997など)。しかし、分析対象が戦後の民生技術に限定されてきたために、軍事技術がテクノ・ナショナリズムの文脈においていかに意味づけられてきたのかという問題設定がなされることはなかった。軍事技術の社会的意味づけのみならず、主に戦前において科学技術開発の中心領域であった旧軍による技術開発とナショナル・アイデンティティとの結びつきがほとんど検討されてこなかったことで、科学技術とナショナル・アイデンティティが結びつく理路の歴史的側面が跡づけられてこなかったという課題も生じている。筆者はこれまで、旧軍技術が戦前戦後を通じていかに社会的に意味づけられ、日本人のアイデンティティと結びついてきたのかを探究することで、これらの課題にアプローチしてきた。

本報告では、筆者のこれまでの研究から軍事技術とテクノ・ナショナリズムの関係を提示し、それから最近の研究関心である戦後日本の防衛産業の社会的位置づけという課題を論じる。

### II. 戦艦とテクノ・ナショナリズムの関係

「軍事技術」と言ってもその内容は多岐に渡る。中でも筆者の研究において特に注目しているのは、軍用艦船を設計・建造する「造艦技術」である。島国である日本において、優れた艦艇の建造は海上防衛の要として明治期以来一貫して追求され続けてきた。また、造艦技術は複数の技術分野を架橋する総合技術であり、近代日本の科学技術開発の一つの中心となってきた分野でもある。

日本のテクノ・ナショナリズムをめぐる先行研究における課題は、分析対象が戦後の民生技術に偏重されてきたことで、民生技術以外の技術分野と日本のナショナル・アイデンティティとの結びつきが等閑視されてきたことにあった。それは同時に日本のテクノ・ナショナリズムの構築過程における戦前と戦後の連続性を見落とすことにもつながる。筆者はこれらの課題に対し、造艦技術に注目することでその克服を試みてきた。というのも、造艦技術とその所産である戦艦は、実際に戦艦建造が実施されていた時期のみならず、敗戦以降も日本の科学技術力の象徴として意味づけられ

ていったからである。その最たる例が「戦艦大和」(以下大和)であろう。大和は日本海軍が技術の粋を結集して建造した世界最大排水量を誇る戦艦であるが、戦前には一般国民にその存在が秘匿されてもいた。しかし、終戦直後には、大和が日本の優れた科学技術の象徴として社会的に「発見」されていたことを筆者は指摘した(塚原, 2022)。以後、大和は高度経済成長などの社会状況と絡み合いながら、技術大国というナショナル・アイデンティティを下支えする一種の象徴として機能していく。

したがって、戦艦が戦前戦後を通じて社会的にいかに意味づけられてきたかを見ていくことで、日本のテクノ・ナショナリズム成立過程における戦前戦後の連続性を検討できると考え、研究を進めてきた。

### Ⅲ. ナショナルな象徴としての戦艦の成立

戦艦を自国のナショナル・アイデンティティの象徴として考える知的基盤は、戦前に既に用意されていたと見ることができる(塚原, 2023b)。なぜ、西洋から輸入された技術的所産である戦艦が、この時期、日本のナショナル・アイデンティティの象徴として見出されたのだろうか。

日本の近代戦艦の国産化は、1906年進水・1910年竣工の戦艦薩摩の建造を契機とする。以後、日本海軍は欧米と建艦競争を繰り広げながら、造艦技術の向上を追求していくこととなる。そのような時代の中で、戦艦が日本人にとっていかなる存在であるか、戦艦の国産建造の意義なども次第に語られるようになっていった。軍事雑誌『海軍 The Navy』における数々の論考もその一つである。筆者が特に注目したのは、海軍／国民、日本／西洋というそれぞれの二者関係の力学の中で、戦艦がナショナルなものとして見出され、そして技術と日本のナショナル・アイデンティティが結びついていったという点である。

戦艦建造の原資が税金である以上、国産戦艦建造事業を推進するためには議会及び国民の理解が不可欠であった。しかしながら『海軍』誌内でも国民の海軍に対する無関心・無理解がたびたび批判されていた<sup>1</sup>ことから、海軍が推し進める戦艦建造事業に対し当時の国民はあまり積極的な意義を見出していなかったことが分かる。ゆえに『海軍』の執筆陣でもあった海軍関係者たちは、国産戦艦建造事業の大義を国民に物語る必要があった。そこで用いられたのが「ナショナルなもの」としての戦艦という語りである。それらの語りにおいては、戦艦が単なる道具ではなく国家の名誉や地位を保持するものとして語られ、かつ戦艦建造は海軍の問題ではなく他ならぬ「国民」の問題であるとされている。つまり、戦艦は単に海軍の戦艦ではなく国民の戦艦であり、国の権威を示す象徴であると位置づけられたのである。このようにして、国民の理解を得たい海軍と説得される国民の力学において、戦艦建造の大義が言語化される中で、戦艦は本来の用途を超えて「ナショナルなもの」としての意味づけがなされていった<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 新造艦建造の意義を認めない国民に対し「我国民の海軍に対するの知識乏しきを示すと共に海国として真に恥べき事」と批判しているように、海軍関係者は、国民が戦艦の国産化に意義を見出さない原因を海事思想の不足に見出した(「国民海軍思想」『海軍 The Navy』8巻4号, 画報社, 1913年)。

<sup>2</sup> 戦艦が海軍という一組織の所有する兵器以上の意味を見出され、ナショナルなシンボルとなったという点で最も象徴的な存在は戦艦三笠であろう。三笠は国産でこそないが、日露戦争の勝利という国民的記憶のコメモレーションとして、1920年代に記念艦として横須賀港に保存されることとなった(塚原, 2023a)。

他方で、戦艦に依拠した国家のアイデンティティは、主に建艦競争における西洋との関係性の中で培われていったことが指摘できる。

初の自国産戦艦である薩摩の建艦時には「技術後発国でありながら先進国に肉薄する我々」という自国像がしきりに語られた。この時期は独力での建艦を達成しつつも、諸外国との建艦競争には未だ立ち遅れていたために、「技術後発国」という負の要素をあえて強調することで、逆説的に自国の優越性を主張するねじれたロジックが用いられたのである。しかし、1910年代半ばに日本に対する西洋からの「後進国」という蔑視が自覚されるようになると、戦艦は日本の高い文明の象徴として物語られるようになる。文明の象徴である戦艦の存在を拠り所として「西洋に比肩する文明を有する我々」という自己像を構築し、西洋からの蔑視に対抗しようとしたのである。そして1920年代には、日本の造艦技術は世界有数の水準に達することとなる。この頃にはもはや自国の技術的優秀性のみを根拠に、技術大国という自負を抱くことが可能となっていた。しかし、建艦競争におけるこの時期の日本の技術的優位は、ワシントン海軍軍縮条約による国際的な建艦競争の停止が大きく影響していたことには留意が必要である。

このように、造艦技術という科学技術に依拠した日本のナショナル・アイデンティティは不変のものではなく、西洋との競争における位置関係によって規定されるものであった。すなわち、常に競争を前提とする科学技術開発の優越性に依拠したナショナル・アイデンティティとは、相対的なものでしかあり得ず、常に不安定さを孕むものであるといえよう。

以上から、科学技術の所産である戦艦を自国の象徴として捉え、その優越性に依拠したナショナル・アイデンティティを構想するという考え方の知的基盤は、明治から大正期にかけて確立したことが分かる。そしてそれは、国民への説得の大義として、または国際的な技術競争を通じて自覚される自国像として、海軍（あるいは日本）という技術的主体と他者との力学の中で構築され、変容していった。

では、そのように準備された知的基盤は、戦後社会へといかに引き継がれたのだろうか。戦後、平和主義へと転回していく日本社会において、なぜ再び軍国主義の象徴たる戦艦が見出されなければならなかったのか。筆者は、戦後社会における戦艦大和をめぐる語りの分析を通じて上記の問いの解明を試みた。

#### IV. 科学技術立国ニッポンの礎としての戦艦大和

戦時中、国民に存在が秘匿されていた大和は、終戦後、主にメディアを通じてその存在が知られていくこととなる。大和の存在が国民に伝えられていく中で、大和を造り上げた技術についても徐々にその実態が明らかにされていった。軍事雑誌などのメディアを通じ、大和が当時世界最大排水量・最大主砲を有する戦艦であったことが1950年代には広く知られるようになるが、そのような世界最高水準の科学技術力がかつての日本が有していたという事実は、敗戦国民である当時の日本人を慰撫した。

「七万二千トンの巨艦は再び造ることはなくとも、日本がそれだけの能力を持っていたという歴然たる事実は、民族の再興に一大精神力を注するものである」（伊藤、1959）という語りからは、大和建造が日本民族全体の誇りとして称揚されるべき歴史であるという認識が読み取れる。つまり、大和は1950年代には既に民族の誇りを示す技術的象徴とみなされていたのである。



1960年代、日本が本格的な高度経済成長期に突入すると並行するように、軍事雑誌や少年誌などのメディア空間においては旧軍の兵器メカニズムに対する関心が高まっていった。大和もそれらのメカニズム言説における一大人気コンテンツとして高い人気を獲得していくこととなる。

そして、何よりこの時期の大和言説に最も特徴的な点として、大和建造によって培われた技術が戦後復興・高度経済成長の礎となったとみなされていたことが指摘できる（塚原, 2024）。「大和などの建造が日本の船造技術にのこした遺産は、はなはだ大きいものであると信じている」（福井, 1968）といったように、戦前の軍事技術と戦後の民生技術に連続性を見出し、軍事技術の蓄積が戦後日本社会への遺産として継承され、戦後の復興と発展の礎となったとみなす語りが登場してきたのである。これらの「大和＝科学技術立国の礎」論とも言うべき言説は、戦前の軍事技術開発を戦後社会にも貢献するものであったと定位することで、平和主義的価値観の下で反動的として抑圧されていた「軍国的なもの」であるはずの軍事技術開発を、肯定的に語り継ぐことを可能とした。以後、「大和＝科学技術立国の礎」論は、大和を語る際の一種の定型となっていく。巨大タンカーをはじめ、戦後国産技術の優秀性が誇示できるような具体的な成果物が続々と登場した1960年代において、技術的象徴としての大和は、単に過去のある時点における優れた技術的偉業というだけでなく、戦後の復興や経済発展にまで寄与した存在として意味づけられていった。

しかし、1990年代以降、高度経済成長がピークに達し長い不況の時代に突入すると、一転して大和は「ダメな日本の象徴」として批判的に参照されるようになる（塚原, 2025）。これらの批判は主として「昭和史の総括」という文脈においてなされた。この文脈において、戦前戦後の連続した「昭和日本」における科学技術開発の独創性や標準化思想の欠如が指摘されたが、これらの日本科学技術の欠点を象徴する存在として大和が名指しされ、不況と衰退の中で反省的に振り返られたのである。

このように、大和は、敗戦後の社会の中でかつての自民族の技術的偉業を想起させる象徴として発見され、戦後日本の現在の状況と密接に絡み合いつつ、技術大国というナショナル・アイデンティティを構成するまさに礎として機能した。重要なのは、平和主義を基調とする戦後社会においても、科学技術という次元においては軍事も他の技術分野と等価であり、技術大国というアイデンティティを構築・維持するために参照され続けたという点であろう。

## V. 課題と展望：戦後平和主義下の軍事技術開発を社会はいかに眼差すか

筆者はこれまでの研究で、日本の近代化の軍事的表れである軍備の近代化の過程の中で、科学技術とナショナリズムとが結びつけられてきたこと、そのように創造されたテクノ・ナショナリズムは戦後にも継承され、時代状況に合わせて膨張あるいは社会に浸透してきたことを明らかにした。今後は、旧軍技術のみならず防衛技術にまで分析範囲を広げ、戦後の平和主義社会の下で、人々が自国の現在進行形の軍事技術開発をいかに受容・解釈しているのか、ナショナリズムとの関連も含めて検討したい。

例えば、1980～90年代にかけて起こった航空自衛隊の次期支援戦闘機の開発をめぐる一連の政治的問題、いわゆる「FSX問題」では、新型戦闘機の調達方法をめぐって国内外で対立が生じた。FSX（現F-2）調達方法決定までの議論においては、軍事的合理性とは異なる論理による議論も存在した。FSX開発の実務者として中心的な役割を担った防衛産業界は、純国産での開発を強硬に主

張したが、その背景には自国あるいは自社の技術に対する強い自負心や自国の航空産業を保護したいという思惑が存在した。このように現在の軍事技術開発の場においても科学技術とナショナルな意識とは密接に結びついている。

今後は、平和主義を基調としてきた戦後日本社会において、軍事技術開発という営みがいかにして成立してきたのか、その歴史的過程と正当化の論理を分析するとともに、軍事技術開発に対して社会からいかなる眼差しが向けられてきたのか、諸メディアの分析から考究していきたい。

※本研究報告は、科研費・研究活動スタート支援「戦後日本の防衛産業と軍事技術開発の歴史社会学：企業論理と平和社会との相関の研究」（課題番号 24K22684、研究期間 2024～2025 年度）の研究成果の一部である。

## 参考文献

- 阿部潔（2001）『彷徨えるナショナリズム：オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』世界思想社。
- 伊藤正徳（1959）「帝国連合艦隊の最期」『丸』第12巻8号，17頁。
- 塚原真梨佳（2022）「戦艦『大和』をめぐるテクノ・ナショナリズム言説のメディア史的研究：1950年代の軍事雑誌『丸』の分析を中心に」『立命館大学人文科学研究紀要』第133号，329-358頁。
- （2023a）「戦艦三笠保存運動のメディア史：国家的戦争記念物の構築過程と力学の分析」『メディア研究』第102巻，123-142頁。
- （2023b）「『ナショナルなもの』としての戦艦：戦艦建造事業を通じたナショナル・アイデンティティ構築過程の分析」『戦争社会学研究』第7巻，240-260頁。
- （2024）「軍事技術をめぐるテクノ・ナショナリズム言説の構築過程とその特質：一九六〇年代ミリタリー雑誌『丸』の事例から」『日本研究』第68集，45-74頁。
- （2025）『戦艦大和の歴史社会学：軍事技術と日本の自画像』新曜社。
- 福井又助（1968）「わが思い出は“不沈艦”とともに尽きず」『丸』第21巻7号，88頁。
- 吉見俊哉（1997）「アメリカナイゼーションと文化の政治学」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学1 現代社会の社会学』岩波書店，157-231頁。